



安全衛生

あれこれ

26

増田労働衛生コンサルタント事務所

所長 増田稔久

本年もよろしくお願ひします。昨年のNHK大河ドラマ「青天を衝け」はご覧でしたか？「日本資本主義の父」と称される主人公の

「道徳経済合一説」を唱えた人物として魅力を感じ、毎回楽しみに見ておりました。この合「説は安全衛生からの視点ですと」「安全生産合一説」と言い換えることが出来るでしょう。

さて、その10月の放送で、渋沢栄一が「官営富岡製糸場」建設にかかわったことを知りました。実は数年前にバスツアーで現地を訪ねたことがあります。短時間の滞在でしたが、歴史ある建造物、機械類に興味は尽きませんでした。

富岡製糸場は、1872年（明治5年）に開業した日本の近代工場の第1号です。数年前には世界遺産にも登録されました。ドラマでこんな場面がありました。渋沢



別掲1 「富岡日記」(和田英著:ちくま文庫)の表紙写真。赤い襷(たすき)と高草履(ハイヒール?)は1等工女のシンボル。髪飾りも1等な誇り高き彼女達でした。

「富岡日記」は、「明治6~7年 松代出身工女富岡入場中の略記」と題され、著者和田英(旧姓横田)が50歳(明治40年)の時に16歳で働いた頃を思い返して記述し、後に刊行されたノンフィクションです。この日記にも「生き血」の話が出て、皆が怖がっている中、当時、村の区長であった横田数馬が実の娘である英に頼み込んだ事情が記されています。

また、同書の後半に記された「富岡後記」には、金沢市の製糸場でのこと、窯場に大勢の女工が入り、「火燃(ひた)き男工」が話に夢中となり、監視がおろそかとなったのでしょうか、蒸気本釜(ボイラー)が破裂し、男女8人の労働者が即死したとされています。



別掲2 産業医が配置された富岡製糸場構内の診療所

すが、困ったことが起きました。工女が集まらないのです。それは、工場では「外国人が娘の生き血を飲む。脂を搾り取られる」と噂されたからでした。フランス人技術者が飲むワインを誤解したので。時の政府が何度否定しても人は集まらず、そこで尾高は自らの娘「ゆう」に頼み込み、やつこのことで最初の工女が誕生しました。ゆうは14歳、勇気ある決断でした。このことが全国に知られ約5000人も工女が集まり、操業が始まりました。

「女工哀史」「職事情」「あゝ野麦峠」(いずれも文庫本が出版)等によって、劣悪で悲惨な労働を思い浮かべてしまいます。ところで、女工の歴史というと、「女工哀史」「職事情」「あゝ野麦峠」(いずれも文庫本が出版)等によって、劣悪で悲惨な労働を思い浮かべてしまいます。しかし、工場での暮らしは、日曜日を休日とし、夜業は禁止され、労働時間は7時間45分、ハロウィーン休暇、夏・年末年始休日があり、寄宿費・食事は無料、入浴も毎晩出来ました。また、構内に診療所(別掲2)がありフランス人の産業医が配置され、治療費・薬代・入院費も無料でした。フランス人の指導の下、魅力的な模範工場だったようすです。

皆様にお伝えしているうちにもう一度富岡に行きたくありません。今度は、時間を掛けて見ようと思えます。ご一緒にいかがですか。

官営富岡製糸場を訪ねて 娘の生き血を飲む？

かし、別掲1の「富岡日記」を読むと何か楽しそうなのです。

それは、彼女達が生活苦により工女になった訳でなく、最先端のフランス技術を学び、帰郷するとその技術を地元で伝習するための役目を担った「伝習工女」と呼ばれる指導者候補だったからです。ですから、彼女たちは地方の有力者の子女であり、地域の人からは「糸姫」とも呼ばれました。